ChalChal

特製パンフレット

ザクロの歌

ベコの歌

愛ゆれる、その刹那

ナツメヤシの樹の上で

武器を花束に

手紙～エルカジエ

Everybody Sunshine

ふるさと

コロナさんがやってきて

役に立てなくてもいい
（Special Track）

　この度はChalChal初のクラウドファンディングにご支援いただきありがとうございました。
みなさまがChalChalの大切な仲間になってくださったおかげで、1stアルバムCDが出来ました。
心から感謝申し上げます。 アルバムと一緒にお楽しみいただけますよう、クラウドファンディング
特別パンフレットを作りました。

【ChalChalの音楽】

　ChalChalのレパートリーは主に、イラクなどアラブ諸国をはじめ中東地域で時代を超えて人々に
愛されてきた古い歌です。 いつも争いの種になってきた今の国境線がひかれる以前に生まれ、作者が
誰かもわからないまま歌い継がれてきた歌もたくさんあります。歌いだしは同じでも歌い手によって
歌詞は好きに変えられていったり、途中で別の古典曲のフレーズが混ざってきたりと、その表情は
自由自在に変化しながらも、歌の魂は変わらずに人々の心をとらえて離さずに、現代でも国境を超え
て広い地域で老若男女問わず愛されています。

　現代日本の私たちが普段身近に接している外国の文化は欧米のものが中心です。私たちは中東文化
と出会ってから、世界の見え方がずいぶんと変わりました。現地で歌に恋に落ちて、まずはアラビア
語など原詞で歌いはじめましたが、やがて日本語の歌詞が生まれ育ちました。母語で歌うことで、
親しみやすく一層愛着が増し、歌に新しい生命が通い出しました。

　新しい文化とは、異なる文化との出会いから生まれるもの。 かつてシルクロードを渡り日本に
やってきた琵琶の起源でもある中東の伝統楽器ウードの深く温かい響きと、アコースティックギター
の明るく乾いた響きの交歓を、世界の各種打楽器のリズムで受けとめながら、ChalChalは演奏面でも
独自のアンサンブルを探求しています。日本の歌をアラビア語でも歌ってみたり、オリジナル曲に
中東のリズムを取り入れたり、地方のアーティストとのコラボ曲に取り組んでみたりと、常に新しい
歌を届けていきたいとチャレンジを続けています。

背景写真：イラク・ユーフラテス川沿いに群生するナツメヤシの樹。首都バグダードの南85km、バービル県ヒッラにて2003年10月
YATCH撮影。紀元前18～6世紀古代メソポタミアのバビロン王国が栄えた場所。

【コロナの時代を乗りこえ生きる元気を届けるCD】

私が主宰する国際文化交流NPO「PEACE ON」の事業で日本に招聘したイラクの芸術家は、記者から投げかけられた問い「この戦禍で今必要なのは食料や医療など緊急支援であり、アートは平和になってからではないのか？」に、次のように答えました。「戦禍だからこそアートが必要なのです。食べものや薬がなければ死んでしまいますが、それだけで生きていても人間とは言えません。文化を共に楽しんでこそ人間なのです」 戦禍でもコロナ禍でも、人を生かすのは人と人との心温かなつながりです。決してすぐさまには人の役に立てない文化芸術活動が、どんな時代も人々の生きる希望をつなげてきました。今このコロナ禍は世界中の人々に襲いかかり、誰もが分断と孤立の苦難の中、人と人とのつながりを求め手探りで新たなチャレンジを続けています。

私たち音楽家も、これまでのような活動はできない中、ライブ配信や動画編集など試行錯誤しています。コロナ禍でもステキな音楽を届けて、みんなに元気になってもらいたい。それが私たち音楽家のさらなる元気につながって、相乗効果で一緒にこのコロナの時代を乗り越えていきたい。

中東地域に生きる人々から、私はこれまで何度も助けられて元気をもらってきました。特にアートや音楽から、生きる勇気と希望をたくさんもらってきました。ChalChalはその希望を大切に育み、新たな日本語詞とアレンジに紡ぎ直した歌たちを記録に残そうと、新たにレコーディングを始めました。

ゲストミュージシャンをはじめ、レコーディングとアルバム制作に力を貸してくれた素晴らしい仲間たち、そしてクラウドファンディングで新しく仲間になってくれた皆さんと一緒に、ChalChalはついに初のフルアルバムCDを世に出すことができました。どうかお楽しみください！ YATCH（ChalChalリーダー）

YATCH(やっち）本名：相沢恭行 シンガーソングライター 宮城県気仙沼市出身。15歳からギター弾き語りを始める。1996年までバンド「吟遊詩人」の歌＆ギターで関東・関西でライブ活動。 2003年イラク戦争中に平和活動「人間の盾」に参加し、後にNGO「PEACE ON」設立しイラクの障がい児への通学バス支援からイラク現代絵画展、イラク美術家招聘など文化交流を始める。

2015年音楽活動再開し全国各地でトーク&ライブ活動を展開。アラブ音楽もとり入れ、オリジナル曲の他にアラブの民謡に日本語訳詞をつけて歌うスタイルを確立する。2017年～2019年イラク市民デモ応援メッセージなどの動画がSNSで数十万回再生されイラク中心にアラブ諸国で話題になる。2019年12月YATCHシングル「役に立てなくてもいい」全国配信リリース。渋谷クロスFM「Saturday ☆バンド☆フィーバー」ラジオMC（隔週土曜）

ウードの荻野仁子です。ウードという楽器と知り合って昨年2020年で20年が経っていました。初めは友人に頼まれて買ってきたのがきっかけだったので、まさか自分がこのように弦楽器を演奏するようになるとは思ってもいませんでした。いくらやっても出来ている感じがしない、というままの20年。嫌な経験も沢山しましたが、貴重な体験も沢山してきたので、ウードを手に取るときは、一緒に戦い抜いてきた戦友の手を取るような気持ちであることが多いです。
私は幼いころより、古代エジプトやメソポタミアの遺跡や文字に魅力を感じます。
ウードという楽器はその当時からあった楽器で、琵琶のルーツだと知ったり、
私の手にしているウードの透かし彫りの部分には向かい合う鳥が彫られていて、
これが東大寺の守護神である手向山八幡宮のご神紋に似ていたり、鳥というのは古代シュメール語でガッシュというらしいのですが、ウードをイラクからスペインに広めた9世紀の偉人ズィルヤーブという方のあだ名はラガッシュ（黒い鳥）という名前だったそうで、ウードの透かし彫りの部分に鳥が彫られているのはそういったところからきているのだろうな、などど古代妄想に浸れるのも楽しいところです。

ウードを弾くようになって、欧米の音楽ではない音楽に巡り合ってきました。
こんなにも美しい音楽が、この世にあることを教えてくれたウードに感謝しています。
日本ではほとんど知名度のないこれらの美しい音楽文化を、少しでも紹介したい。
知ることによって、理解が生まれ、差別や偏見が減っていくのではないか、と思っています。
エジプトの歴史の中で私が一番好きな人物は、アクナテン（アメンヘテプ4世）という王様で、戦争はやめて平和や愛にみちた世の中にしよう、という考えは、当時は理解されなかったために異端とされましたが、残された彼の像も彼の妻（ネフェルタリ）の胸像も今も本当に美しいです。
ChalChalの音楽では、今回、“聴きやすい異国の音楽”をめざしました。
異端かもしれませんが、これからもっと美しいものにしていきたいと、平和と愛にみちた世の中になるようにと願い作りました。

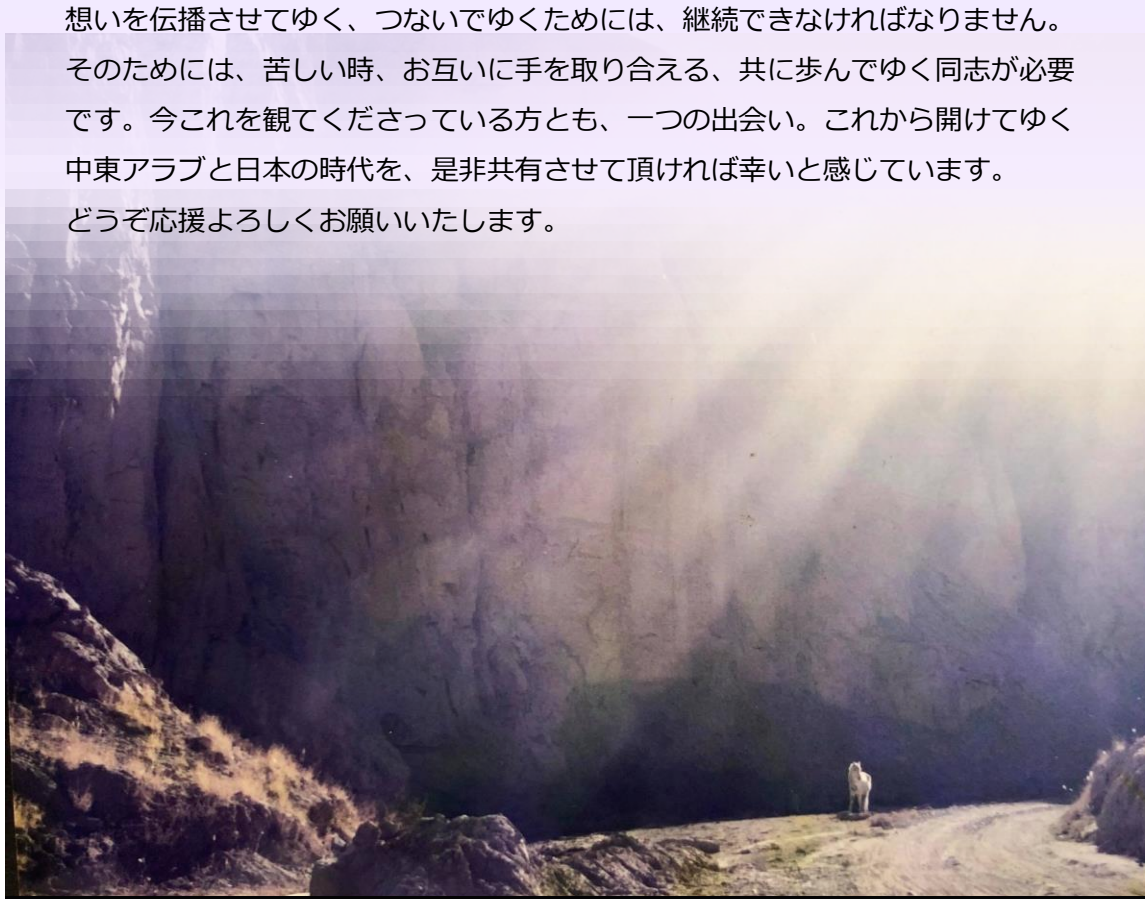
荻野仁子（おぎのさとこ）福島県出身。ウード弾き。
3歳より大学入学までクラッシックピアノを学ぶ。その後エジプト、チュニジア等への渡航を重ねるうちウードと出会い、2003年チュニジアの国宝といわれるウード奏者、故アリ・スリティ氏の弟子である常味裕司氏に出会い、本格的にアラブ音楽・演奏法を学ぶ。松本泰子氏に歌唱師事。 2011年アブダビのウードハウスにてエジプト人女性ウード奏者Sherine Tohamy氏、カイロではヘルワン大学音楽科Khairy Amer氏らと交流。大使館等での演奏、IRIBイランイスラム共和国国営放送・国際放送ラジオ日本語等ラジオ出演、日本アラブ首長国連邦協会機関誌、エジプト世界駅等雑誌掲載。2016年にスペイン、モロッコ、エジプトへ渡り地中海音楽への見聞を広めながら演奏活動をし、音楽は国境を超えて通じ合えることを体験。クルド音楽・セファルディ音楽・ペルシャ音楽も演奏する。トルコ文化センターウード講師。2018年秋1stアルバム「さとうた」完成。2019年放送NHKスペシャル「食の起源」サウンドトラック参加。

背景写真：おなじみクフ王のピラミッド！今回メンバーの背景写真はそれぞれが自分で撮った思い出の１枚を選びました。

パーカッションの船原と申します。この度はご賛同ありがとうございます。
今回、ChalChalの一員としてこのクラウドファウンディングに参加させて頂くことは、ただの資金集めの活動とは思っていません。Yatchさん荻野仁子さんと出会い、このChalChalという活動を通して、今、中東アラブと日本をつないでゆこうという想いを共有してくれる 『仲間』を募っているのだと感じています。

私の大好きな土地チベットには、タルチョと呼ばれる仏教経文が描かれたカラフルな旗があります。風になびくタルチョは、その教えが風に乗って世界中に届くようにという祈りを込められた旗です。そしてそこにはルンタと呼ばれる馬も描かれ、同じく風にのって遠くどこまでも、世界中を駆け廻ります。
わたしにとってChalChalで制作する曲達が、まさにそのルンタであるよう感じ始めています。

想いを伝播させてゆく、つないでゆくためには、継続できなければなりません。そのためには、苦しい時、お互いに手を取り合える、共に歩んでゆく同志が必要です。今これを観てくださっている方とも、一つの出会い。これから開けてゆく中東アラブと日本の時代を、是非共有させて頂ければ幸いと感じています。
どうぞ応援よろしくお願いいたします。



船原徹矢（ふなはら　てつや）パーカッション：南アジア～中東の打楽器を用いてアラブ／トルコ音楽他 様々なジャンルにて演奏活動中。 大阪芸術大学映像学科卒。 在学中よりスチール・映像を制作。卒後ライター活動を主に世界60カ国以上を旅する中、様々な文化・音楽に触れ、太鼓で詠うことの素晴らしさを知ると共に、ヒーリングの世界へ。インドにてPt.Ishwal lar Mishra氏にタブラバヤを師事。渡印を重ねる。 Glen Velez氏に世界各地のフレームドラム奏法を集約したコンテンポラリーテクニックを。立岩潤三氏にアラブリズムの基礎を師事。世界各地を訪問しトラッドなスタイルを吸収する中、チュニジアにてレク（中東タンバリン）の伝統的奏法からモダンまで様々なスタイルとリズム理論を学ぶ。
様々なジャンルのミュージシャン・ダンサーとの共演も多数。都内を中心に演奏活動・パーカッション指導を行う一方、治療家としての活動、障害者施設等での介助技術指導など、身体操作に関するセミナーも精力的に行っている。

背景写真：背景に使おうと思って神棚に飾ってある写真を写メしようと額縁から出したら、奥から出てきたのがこの白馬の写真だそうです。チベットで一人ボロボロで歩いてヒッチハイクしてた時に、一頭現れた白い馬の写真、だそうですよ。かなり色褪せてきているからどうかな、とのことですが、ルンタ（上の文章）について書いた後で出てきたので、運命感じちゃいますね。

収録曲解説♪YATCH
協力：Safwat Saab

چلچل علي الرمان
ザクロの歌（チャルチャル）/Chal Chal Alayea El Rumman
（20世紀初期イラク/作詞作曲者不明）

歌い出しの「チャルチャル～」という音の響きが大好きで、そのままユニットの名前にもしました。「ねえYATCH、この曲もやってよ」と紹介してくれたのは、僕がイラクの歌を歌い始めたことを面白がり喜んでくれた友人のイラク人画家ハーニーさんの息子フセイン君（2017年当時は高校生）。初めて聞いた時、なんだか昔の日本のフォークソングっぽくも聞こえて、ギター弾き語りも合いそうだなと思いレパートリーに加えました。
イラク独特の音楽体系のパイオニアであり歌手のYusuf Omar（1918～1986）から、西洋のギタースタイルを取り入れたイラク人歌手のIlham al-Madfai（1942～）が歌い継ぎ、近年では若手エジプト人歌手Hamza Namira（1980～）のバージョンがよく知られています。
「チャルチャル」とはアラビア語イラク方言で「頭上に覆いつくす」という意味の動詞で、歌詞ではザクロの木の枝が歌われています。ザクロ、レモンはセクシャルな隠喩として詩の中で用いられるので、男女の熱く切ない激愛のイメージも浮かびますが、それとは別に政治的に深い意味も隠されているとのことです。
作詞作曲者は不明ですが、一説ではこの歌が生まれたのは一世紀を遡ります。サイクス・ピコ協定によりそれまで一帯を統治していたオスマン帝国が分割され、イギリス委任統治領イラクに変わった1920年頃だそうです。
かつての支配者オスマン帝国のスルタン（君主）のタルブーシュ（帽子）はザクロ色であり、解放するためと称してイラクを占領したイギリス人はレモン色の肌ということで、「いくら美味しくてもどちらもいらない。僕（イラク人）は僕の道を行く」という意味が込められているようです。
今回のアルバム収録では代表的な部分だけ意訳して歌ってますが、原曲では最後にイスラーム教シーア派の聖地カーズィム廟に行ってなど、宗教的な色彩が濃くなっていきます。イラクの近代史と重ねて大変興味深いので機会があれば歌詞全体を分析して紹介してみたいです。
＊サイクス・ピコ協定：第一次世界大戦中の1916年にイギリス、フランス、ロシアの間で結ばれたオスマン帝国領の分割を約した秘密協定。今日の中東の混乱の元凶とも言われる。

طلعت يا محلا نورها
ベコの歌（太陽が昇る）/Talaat Ya Mahla Nourha
(サイエド・ダルウィーシュ/سيد درويشエジプト)

アラブで最も愛されているレバノンの歌姫Fairouz（1935～）をはじめ、シリアの大御所歌手Sabah Fakhri（1933～）など数多くの歌手に歌われ、アラブ全域で知られているこの歌は、エジプトのポピュラー音楽の父ともいわれる作曲家・歌手のサイエド・ダルウィーシュ（1892～1923）が作ったと言われています。
僕がこの曲と出会ったのは2014年。京都でシリア人留学生達と一緒に主催したシリアの写真＆絵画展の関連イベントとして企画したウード奏者常味裕司さんのコンサートで、せっかくだから一緒にアラブの歌を歌おうとなりおしえていただきました。
「太陽が昇ったよ～さあベコのお乳しぼりにいこう～」って感じの軽快で朗らかな歌で大好きになりずっと歌ってきました。（原曲では جاموسةジャームーセなので本当は水牛ですが、今年は丑年ですし水牛も牛の仲間にはかわりないのでベコでご容赦くださいませ）エジプトのサイード方言の訛りで歌われているのでずっとエジプトの歌だと思っていましたが、前にイラクの友人と一緒に歌った時 「これ元はイラクの歌だったのを、サイエド・ダルウィーシュがパクったんだよ～」って聞きました。どこの国でもあるお国自慢？とも思って調べてみました。
音楽と歌の歴史家ハミード・アルバジによると、イラク南部バスラの歌がこの歌の元歌であり、テェラと言うエジプトの歌手（ダマスカスのユダヤ人という説もあり）が20世紀初頭バスラに歌を習いに留学したときにこの元歌を覚え、当時の中東で音楽で最も有名な町だったシリアのアレッポの劇場で歌うようになりました。1910年サイエド・ダルウィーシュは18歳でアレッポに留学して3年間音楽を学びました。その時にテェラが歌うこの元歌に感動し、歌詞を変えてエジプトのサイード方言で歌うようになった、とのことでした。（クルド人ミュージシャン作曲説もあり）
この歌に限らず、アラブでは作詞作曲者不詳の古い歌が時代時代の歌い手によって好きに歌い替えられて、各地で愛され歌い継がれています。著作権という概念が薄いせいもありますが、録音技術がない時代からいい歌がこうして好きに歌い継がれてきたことで、生きた歌の命が保たれて今の時代を生きる僕たちに届いているって、なんてすばらしいことだろうと思うのです。
僕たちChalChalもそれに倣い好き勝手に日本語に訳して歌うことで、生きた歌を生きたままで未来に届けていきましょう。
ちなみにこれは最近知った話ですが、歌われているベコ（水牛）の乳（ミルク）とは、ハリーブ・スバーアと言う飲むと気が大きくなるミルク、アルコール度数が高く水を入れると白濁するアラクの隠語だそうで…
＊アラク：ナツメヤシやブドウから造る蒸留酒。トルコではラクと呼ばれ、ギリシャのウーゾも同系統。

لما بدا يتثنى

愛ゆれる、その刹那/Lamma Bada Yatathanna

（アラブ・アンダルース伝承曲）

今回収録曲の中で起源が最も古く、8～15世紀イスラーム時代のアンダルース（スペイン南部アンダルシア地方）で発展したムワッシャハというアラブ古典詩の代表的な形式による伝承曲で、アンダルシアの詩人San al-Din Ibn al-Khatib (1313～1374)の詩を基に、エジプトの作曲家で歌手のMuhammad Abd al-Rahim al-Maslub（1793～1928）がメロディーを付けたともいわれています。

Fairouzをはじめ近年ではシリアのアルメニア人歌手Lina Chamamyan（1980～）などアラブ世界で多くの歌い手に愛され歌い継がれてきたのはもちろんのこと、アラブ、中東地域を超えて世界中で最も広く知られているアラビア語の古典曲のひとつであり、ここ日本でもアラブ音楽演奏家か愛好家ならばランマーバダ―ヤタサンナーと聞けば大概の方は知っているのではないでしょうか。僕もウードの弾き語りを初めて覚えたのはこの曲でした。

10拍子という普段慣れないリズムで演奏されるこの曲は、拍を意識すると難しくも感じますが、美しいメロディーにただ身をゆだねていると全く自然にリズムに乗れるから不思議なものです。10拍子の他、9、7、5拍子など、中東地域をはじめ世界には様々なリズムが存在し、音階もアラブ音楽の微分音のように、西洋音楽の平均律（転調などしやすいように1オクターブを均等に12で割っている）では表せない音で溢れています。世界の音楽の多様性はそのまま人間の多様性、そして命の多様性を表していると言えるでしょう。

今回の収録では荻野仁子のウードと歌をメインにアラブの葦笛ネイが絡み合い、時折ロックなリフを取り入れたChalChalのニューバージョンでお届けします。

فوق النخل（فوق إلنا خل）

ナツメヤシの樹の上で/Foug El-Nakhal

（イラク民謡/作詞作曲者不明）

この歌は2003年イラク戦争直後のバグダードで初めて聴いて一発で恋に落ちてしまいました。生命の樹とも呼ばれイラクの象徴でもあるナツメヤシの樹を歌ったこの歌にすっかり魅了されて、NPO活動でアートのみならずイラクの豊かな文化を紹介していく大きなきっかけになった歌であり、また2015年音楽活動再開後に取り組んできたアラブの歌を日本語でも歌うというChalChalのスタイルは、この歌の日本語訳から始まったのでした。

この歌は古くから伝わるイラク民謡で、伝説のイラク人歌手Nazem al-Ghazali (1921～1963)が歌いイラクのみならずアラブ諸国全域で大ヒットしました。近年ではIlham al-Madfaiや、Kazem al-Saher（ 1957～）が歌うバージョンがよく知られています。

作詞作曲者は不明ですが、20世紀初期に多くの大物歌手に曲を提供したイラクのユダヤ人音楽家兄弟Saleh＆Daud al Kuwaitiによって編曲され広がったようです。歌詞は歌い出しの一節以降は歌い手によって変えられて様々なバージョンがあります。

歌詞といえば、タイトルにもなっている فوق النخلFoug El-Nakhal（ナツメヤシの樹の上で）が、アラビア語の単語の区切る箇所を変えるとفوق إلنا خلで読み方は同じでも意味が「僕らの友だち（愛する人）が上に」となり、これはナツメヤシの歌ではないとアラブ人同士でもしばしば熱い議論のネタになっています。僕もこの歌を歌うようになって何度もアラブ人から指摘を受けてきました。調べると、歌の背景にはやはり諸説あるようです。

【ナツメヤシではない説】・昔バグダードの集合住宅では1階は貧しい人、2階は裕福な人が住むエリアに分かれていて、1階に住む貧しく若い男が2階のバルコニーから顔を出した美しい娘に一目惚れした。直接声をかけたいが憚られるので、かわりに歌で彼女の気を惹こうと「僕らの友だち（愛する人）が上に」と歌い出すとそれがまたあまりに美しい歌声で、近所の人々も魅了され出てきてみんなで一緒に歌い始めた。

【ナツメヤシ説】・イラクなどナツメヤシを誇りとする国々では、ナツメヤシの樹の上という表現は荘厳な最高級の富を表す。

・イラクの若い男は、ナツメヤシの樹の上に満月を見ると愛する人の顔を思い出す。

正直僕としてはどの説が正しいかとかはどうでもよくて、上記のイメージをすべて盛り込めるダブルミーニングの言葉を巧みに選んだ作者はなんて粋なんだろうって思うのです。この曲をおしえてくれた友人ハーニーは「これはナツメヤシの歌だ。堂々と歌え」と言ってくれたので、僕は自信を持って「ナツメヤシの樹の上で」と歌い、伝統に倣い好きな歌詞（日本語意訳）をつなげて歌っていこうと決めました。この曲を僕が歌った動画がアラブのSNSで30万回以上再生され大きな話題になり、ChalChalで2020年3月20日にシングルリリース。今回のアルバムにはさらに新たなアレンジに挑戦し再度レコーディングして収録しました。

＊ナツメヤシ：ヤシ科の高木で果実はデーツ（Date）。デーツはビタミンやミネラル豊富な完全栄養食として北アフリカや中東では主要な食品で、日本ではお好み焼きのソースの甘味原料としても使われている。

武器を花束に

作詞：猪熊根太　作曲：ChalChal（2019年）

生まれ故郷である宮城県では、これまでイラク関連の講演会からライブまで様々なイベントでお世話になってきました。県の中心である仙台市や実家がある気仙沼市の他に、登米市ではなんとPEACE ON支部（代表：及川智さん）まで発足し、数多くのユニークなイベントが開催されてきました。
熱い魂でいつも盛り上げてくださる登米の詩人、猪熊根太さんの詩は何度かライブでの即興演奏で歌わせていただきましたが、ChalChalとして正式に作曲の依頼をいただき取り組み完成した曲がこの歌です。
コロナ禍でしばらくライブツアーができませんでしたが、2020年夏に登米のみなさんの尽力でライブが実現しこの曲を詩人と共に歌うことができました。歌う度に詩人の魂が歌に宿り、登米の風景に新しい光が差しこんで、その歴史と風土、そして人の奥深さに一層心惹かれるようになりました。
遥か異国で古から愛されてきた歌を歌い継ぐ中で、その地に生きてきた人々の心を身近に感じてきた僕たちが、今度は自分自身の故郷宮城に根ざして生きる人々と共に歌を作り出すことで、それを聴く人たちの心に新しい故郷を映し出せるのかもしれない。そんな希望を胸に、このコラボ曲をきっかけにこうした取り組みを増やしていこうとアルバム収録が決まりました。
＊今回のクラファンのリターン「あなたの歌つくります」は高額リターンにも関わらず好評ですぐに完売・追加となりました。これを機に今後ChalChalではオーダーメイド音楽制作の仕事も展開してまいりますので、ご興味のある方はぜひお問い合わせください！

～砂漠の歌垣が聴こえる　猪熊根太～

軽妙なギターと重厚なアラブ楽器ウードのメロディと打楽器のリズム。熱情あふれる詞と哀愁沁みる声。初めて聞いたアラブ歌謡は異郷の響きが、なぜか懐かしかった。気仙沼市出身の相沢恭行さんと郡山市出身の荻野仁子さんの東北生まれの血潮が、同郷の匂いを醸し出していたからかもしれない。
　武器を溶かして農具と工具を造る鍛冶屋と故人に手向ける花束を売る娘の隊商が、難民キャンプのオアシスを巡る短編劇詩が湧き上がった。「武器を花束に」は中近東と日本を結び、歌い継がれる祈りを込めている。

いのくまこんた　1959年生まれ。宮城県登米市登米町在住。漢方薬店経営。中国医療　氣功・薬膳指導員。笑いヨガリーダー。
演劇情動療法士。戯作祭典・稀人で地方演劇の脚本・出演・演出。著書「みんなの氣功」「みやぎ地産食材で万国薬膳料理レシピ」

相澤一夫　KAZUO AIZAWA

1941 宮城県石巻市に生まれる
1973 新象展　初出展・入選、河北展　初出展・入選、受賞・3
1980「第三世界とわれわれ展」「パレスチナ現代美術展」
1983 個展「Xへの漂流シリーズ」展 以後、個展3
1996 宮城県芸術祭展／県知事賞
1997 宮城県芸術祭展／大賞（以後、4度他賞受賞）
2002 リアス・アーク美術館企画「相澤一夫展」
2011 JR東日本盛岡支社発注 JR気仙沼駅舎アート制作
　　4～6月　東日本大震災気仙沼現状スケッチ《未公開》
2012 ヨルダンDar Al-Andaギャラリーで開催された
　　東日本大震災チャリティーイベントにてスケッチ一部出展
2013 絵本「大水もその愛を消すことができない」三浦淑坤・作
　　（あいりん社オフセット企画出版）の絵を担当
2014 リアス・アーク美術館20周年記念展
　　ボックスアート「戦士の一服」出品（同美術館買上げ）
2016 Sea Candle Coffee企画「相澤一夫スケッチ絵画展」
2017 芸協・現運営委員《現在と過去》展 2月
　　ミックスド・メディア作品「漂着者」変10号
　　カメイ美術館・仙台　1月31日～3月12日
2018 相澤一夫 展 ～漂流X beyond 3.11～
　　京都堺町画廊3月7日~12日
現在　気仙沼市在住　宮城県芸術協会会員・運営委員

「荒野黒い大地＝X」2021年　相澤一夫

（ChalChalミュージックビデオ「手紙～エルカジエ」コラボアート作品）

絵画写真撮影：黒木麻恵

手紙～エルカジエ

手紙

（作詞・作曲：YATCH）

元歌は1994年に生まれ、バンド「吟遊詩人」（1991～1996年）で活動していた頃から歌い続けてきた曲です。当時生活していた東京のJR中央線阿佐ヶ谷駅近くの風呂無し便所共同四畳半アパート（家賃18,500円！）の庭に植えられていた大のお気に入りの月桂樹が切り落とされてしまい、あまりのショックと悲しみのなかで生まれた歌です。2015年音楽活動再開後も歌詞とアレンジを変え再生を繰り返し、今回のChalChalアレンジでは11拍子がメインのVersion4になります。

エルカジエ/Elqajîye

（トルコ東部デルスィム地域伝統歌）

現在のトルコ東部デルスィム地域で古くから歌い継がれてきた伝統歌。惚れた娘の両親が結婚の許可を出さなくて、駆け落ちしようと約束したのに、お前は来なかった…という悲痛な状況を歌った歌。タイトルでもあり繰り返される「エルカジエ」は、かつて存在したという村の名前。以下はザザ語で歌われているオリジナルの歌詞の日本語訳です。

エルカジエ、エルカジエ　ああエルカジエ…
お前の母親は残酷だ
お前の父親は承諾したのに
ああ俺のこの苦しみ
お前の苦しみで俺の心は押しつぶされた

恋人の苦しみを　世間に聞けばいい
何をすればいいのか　世間に聞けばいい

来て、行こうと俺は言ったじゃないか
なぜ俺たちの世界を真っ暗にしたんだ
ああ俺のこの苦しみ
お前の苦しみで俺の心は押しつぶされた

第一次世界大戦の後、オスマン帝国が解体され新たにトルコ共和国樹立に至る 「トルコ革命」の過程で、古くからその地域で生活していた少数民族の多くがトルコ政府による弾圧の犠牲になりました。トルコやイラン、イラク、シリアにまたがる地域に生きる先住民族、クルド人への弾圧が広く知られています。エルカジエという村もトルコ政府によって消されたと聞いたことからクルド人の歌だと思い紹介していたところ、専門家からその過ちの指摘と、詳しい解説をいただきました。
歌われている言語はザザ語であり、ザザ語がクルド語の方言のひとつに入るというコンセンサスは存在しないこと、ザザ語を話す人々にとっては、自分たちがクルド人と括られることは第三者からの無神経なカテゴライズであることがわかりました。
トルコ政府による弾圧に伴い激化するクルド独立運動とも複雑に絡み合い、政治的にセンシティブな問題であったことがわかったので、エルカジエの紹介を「トルコ東部デルスィム地域の伝承歌」と訂正しました。
国家の暴力によってふるさとを消される悲劇は、中東地域のみならず世界各地で今日も続いています。それはいつの時代も際限のない人間の欲望によって引き起こされていうという点で、僕のなかで「手紙」の歌の世界とつながりました。このアルバムでは「手紙」に続けてこのエルカジエを独自の意訳を交えて歌っています。

Everybody Sunshine

（2021年グナワMIXバージョン）作詞・作曲：YATCH

元歌は1994年、曼珠沙華公園（埼玉県）での野外音楽イベントでキャンプファイヤーを囲みアフリカの太鼓「ジャンベ」のセッションに混ざりアドリブで歌っている時に降りてきたフレーズから生まれ、バンド「吟遊詩人」時代の代表曲として歌ってきました。Everybody Sunshineというサビに祈りを込めた太陽と生命の賛歌です。
音楽活動再開後イラクの難民キャンプでこの曲を歌うと子どもたちがすぐに曲を覚えて一緒に歌ってくれて、音楽に国境はないということに改めて気がつき再びレパートリーとして積極的に歌うようになりました。
今回ChalChalで挑んだレコーディングではゲストにモロッコのグナワ音楽を演奏するGnawa Tokyoのヤマダカズヒロさんと朝倉佳恵さんがアレンジから参加していただき、実験的なグナワMIXバージョンが生まれました。Gnawa Tokyoのお二人の紹介にもありますが、グナワはアラブ・イスラームとアフリカをつなげてきた歴史を持っています。アフリカの太鼓のリズムから生まれたこの歌が、僕自身のアラブの旅を経て、再び歌い出したところ、今度はグナワによってアフリカに回帰したことに大きな驚きと喜びに包まれました。
さらには、僕のボイストレーニングの先生でもあるシンガーのLEGEさんがゲストボーカルとして、彼女の愛弟子さんたちもコーラス要員として参加してくれました。グナワボーカルのヤマダさんの艶やかで深く渋みのある美声と、アメリカの黒人霊歌、ゴスペルを彷彿とさせるLEGE先生のパワフルでハートフルな歌声が重なり合う、なんと贅沢な歌の交歓でしょう。奇跡的な音の邂逅によって、大地に降り注いだ愛のSunshineが地球に遍く満ち満ちて、宇宙に昇華していくようなバージョンに仕上がり感謝で胸がいっぱいです。

ふるさとيا وطني　（1914年日本唱歌）

作詞：高野辰之 作曲：岡野貞一

アラビア語訳：サフワット・サーブ صفوت صعب

言わずと知れた唱歌。この歌が国歌だったらと思うくらい大好きで、海外で日本の歌を紹介するときに必ず歌う歌です。
ヨルダンでシリア人難民の家族を訪問してこの歌を歌ったら涙を流したおじさんがいました。故郷を思う気持ちは世界のどこでも同じで、初めて聞く異国の歌で言葉の意味がわからなくても、歌に込められた故郷への思いは共鳴するし、戦争や災害で故郷を奪われた人にとっては、歌うことで心に故郷を持ち続けて、心の故郷は誰にも奪うことができないのだと気がつきました。
それでも歌詞の意味もわかればより伝わるのではないかと、日本に滞在するシリア人サフワットさんにお願いして美しいアラビア語に訳してもらいました。彼も戦争の影響で長年故郷には帰れていません。
レコーディングではアラブの葦笛ネイ奏者の宮崎信子さんが息遣いも細やかに響く篠笛を吹いてくれています。ウードの音色と優しく戯れて、アラビア語の歌詞にも溶けて心地よく染みわたります。この歌をきっかけにして、中東地域の歌を日本語で歌うだけでなく、日本の歌をアラビア語に訳して歌うレパートリーも増やしていこうと思います。

コロナさんがやってきて

作詞・作曲　YATCH（2020年）

2020年春から新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るいました。仕事もお金もなくなりましたが、たくさんの方々から温かいご支援が届き何とか生き延びることができました。感謝の気持ちをSNSで伝えようと書き進めていくと、いつの間にか詩になっていました。興に乗って一気に書き上げ投稿すると「歌にしてほしい」とコメントをいただき、その勢いで曲をつけて生まれたのがこの歌です。
緊急事態宣言発令中でライブもできないので、この曲をきっかけに自分自身の動画編集によるミュージックビデオ制作も始めました。これまで当たり前にできていたことができなくなりましたが、逆にこれまでやろうと思っていながらできていなかったことを始めることができたのです。
それからコロナ関係の給付金や貸付など申請してなんとか食いつなぎ、文化庁の芸術文化活動継続事業にも採択され音楽活動を続けることができました。さらにはCAMPFIREさんの手数料無料のコロナサポートキャンペーンに応募して初めてのクラウドファンディングにチャレンジしたところ、100名近いみなさまからのご支援のおかげで目標額達成し、こうしてChalChalの1stCDを作ることができました。
企画当初この曲はYATCHソロ曲としてCDのボーナストラックに入れるつもりでしたが、試行錯誤の末にユニークなアレンジが生まれ正式にChalChalのナンバーとして収録することにしました。
「難有り、有難し」という言葉もあるそうですが、「ピンチをチャンスに」をこれほどまでに深く学べたのはコロナさんのおかげです。まだまだ世界はコロナ禍の真っただ中であり多くの困難が続いていますが、今ここで生かされていることに感謝して、この見えない命の闘いを乗りこえることで新しい世界が生まれることを信じて歌い続けていきます。

役に立てなくてもいい

作詞・作曲　YATCH（2015年）

2003年、平和運動「人間の盾」に参加してイラク戦争を体験しました。戦争は止められませんでしたが、「大変な時に一緒にいてくれてありがとう」と言われたことを励みに、仲良くなったイラクの友人たちとはその後NGO活動を通して交流を続けてきました。2011年3.11東日本大震災でふるさとが津波にのまれたときには、イラクの友からの温かい言葉に励まされました。イラクのアーティストたちが戦禍でも表現を続ける姿勢に心を打たれ、しばらく休んでいた音楽活動を2015年に再開しました。困難な時の友とは、これほどまでに心を支えてくれると気づかせてくれたイラクの友人たちへの感謝の想いからこの歌が生まれました。
再び歌い始めたのは、この歌を歌うためだったのかもしれない。
そんな思いでギター一本で歌い続け、2019年6月オーディションライブで準優勝したのを機に
ChalChalメンバーと新バージョンでレコーディング、12月には新生YATCHとして初の
シングル配信リリース、直後にエジプト・カイロでミュージックビデオを撮影しました。
この度のアルバムにはCDのみのスペシャルトラックとしての収録です。（配信版には入っていません）
＊YouTubeミュージックビデオ（撮影＆編集：Sarah Riad）
＊JOYSOUNDカラオケ本人歌唱ミュージックビデオで配信中！

YouTube役に立てなくてもいい MV YouTube

多くのシリア人には、日本は発展したとても素晴らしい国だというイメージがあって、強い憧れがあります。
私は六歳の時、シリアのテレビで「風雲!たけし城」という日本の番組を見て、日本人は面白くて素敵だなと思ったことが最初に日本に興味を持ったきっかけです。そして、小学校三年生の時、私の通う学校で空手コースが開かれました。これは、シリアではとても珍しいことです。日本に憧れていた私は、空手が日本の武道だと知って、是非やってみたいと思いました。それから四、五年間空手を続けました。

高校三年生だった時、私は、シリアの大学で初めて日本語学科が開かれたという新聞記事を読みました。憧れの国の言葉です。短期大学の農業科を卒業後、農業関係の仕事をしながら一年間大学の入学試験のために勉強して、日本語学科に入りました。

2011年にダマスカス大学日本語学科を卒業した後、シリアの状況が悪化した為、ヨルダンに避難しました。友人たちの協力もあって、2015年にヨルダンから日本に来ることができました。いつも日本とシリアの架け橋になれたらいいなと思って、アラビア語教師やアラビア語関係の仕事など、様々なしごとをしてきました。
音楽も好きです。日本の歌詞をアラビア語に翻訳して、メロディーに合うようにアラビア語で歌詞を書きました。加藤登紀子さんの娘さんであるYaeさんが「椰子の実」という曲を、そして荻野仁子さんとYasuyuki　Yatch　Aizawaさんが“CDさとうた”で合唱曲「群青」をアラビア語で歌っています。
今回「ふるさと」のアラビア語の歌詞を書きました。是非聴いてください。

Safwat Saab サフワット・サーブさん
アラビア語翻訳・アラビア語指導

アラビア語の分からないところを、
たまに教えてもらいます。
色々なアイディアを持っていて、
今回はとてもきれいなアラビア語の詩を作ってくれました。
いつも本当にありがとう！！

ha

音楽も人生も「旅」であると感じ、世界中の音楽を迎え入れ、独自のスタイルで演奏。　神奈川県出身、カリフォルニア育ち。インディアナ大学フルート科、ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院民族音楽科卒業。フルートをトーマス・ロバーテロ氏、篠笛を元鼓童メンバーの渡辺薫氏に師事。アラブの笛ナイをバッサーム・サーバ、サミール・シィブリーニ各氏に師事。ニューヨークを拠点に活動中、様々なプロジェクトに参加し、北南米・ヨーロッパ・中国ツアーに出る。

宮崎信子さん　フルート・篠笛奏者、作曲家

自然で自由な雰囲気を持っていて、笛の音で旅に連れて行ってくれます。今回熱烈オファーをしてChalChalの要望を受け入れていただきました。ありがとうございました！

2015年、自作曲であるオーケストラと篠笛のための「祈り風」をカーネギーホールで演奏する。同年、自分のアートで社会の役に立てないものかと中東のレバノンに移住し、演奏の傍らシリアやレバノンの子供達の音楽教育に携わる。「Oumi（ウーミ)」としてアルバムを発表他、プロジェクト・タンウィーンではギター奏者ジョー・アッワードとアラブ音楽、即興等を取り入れたオリジナルな世界を繰り広げる。2020年に帰国し、探求型学習を通して日本の子供達と「音楽の探求」を行っている。nobuflute.com

メッセージ：ひょんなことからアラブ音楽に出会い、レバノンに住み、気が付いたら私の音楽も、人生観も変わっていました。アラブの人達には、とても温かいエネルギーと思い出を頂きました。そして日本でも、同じように温かく迎え入れて下さったChalChalの皆さんと作った音楽が皆様の心に届けば幸いです。

youtubeチャンネル　LEGE宇宙式ボイスカウンセラーで検索！有名TVCM多数歌唱。メジャーアーティストから明日を煌めくシンガーのカウンセリングを担当。

みんなが太陽で、それぞれが輝き、照らしあう世の中への想い。豊かに、シンプルに生きる事の大切さを感じました。愛に溢れた、名曲に参加させて頂きありがとうございます❣

LEGEさん　ゲストボーカル
今回エビバデサンシャインでコーラスに参加していただきました。お忙しいところありがとうございました！

志葉 玲さん　写真撮影
今回クラウドファンディングや
ジャケット写真の撮影をしていただきました。
いつもありがとうございます！

戦争と平和、人権や環境問題を取材し、Yahoo！ニュース等で発信しているジャーナリスト。本CDのジャケット写真を撮影。相沢恭行とは、イラク戦争取材の中で出会い、空爆下のバグダッドでの平和運動「人間の盾」で行動を共にした。ChalChalについては「アラブ伝統音楽と日本のフォーク／ロックの要素が融合していて、超面白い！これが本当のクール・ジャパン」とコメントしている。

オリエンタルダンサー、コレオグラファー。エジプト・トルコ・イラン・アゼルバイジャンなどのオリエンタルダンスや民族舞踊、ロマダンスを踊る。本場トルコでもゲストダンサー、講師を務め経験を積む。
近年は国際文化交流の場でも活躍。

IKUYO Orientaldance Arts「StudioKelebek」主宰
www.studiokelebek.com
メッセージ：結成当初からのファンの1人です。異国の歌に日本語が新鮮！思わず口ずさむ中毒性があり、楽しく踊らせていただきました。

Ikuyoさん
結成時よりミュージックビデオで踊っていただいています。
いつもありがとうございます！

二宮 佑介さん
渋谷宮益坂のレコーディングスタジオ
ONE HEART MUSIC ハウスエンジニア

リリースおめでとうございます！とても素敵な作品に携わる事ができ嬉しく思います。今作のレコーディングでいつも感じていたのは、ChalChalさんの音楽を聴くと異国の風を感じ、まるで旅に連れていってもらっているようなそんな感覚になるということです。支援者の皆様にも楽しんで頂けると確信しております。ありがとうございました！

ChalChalの音楽を良く知ってくれている二宮さん。いつも穏やかどんな時でも神対応で頭があがりません。こちらこそいつもありがとうございます！！！

—今回「Everybody Sunshine」でグナワ音楽と共演させていただきました。グナワ音楽とは？—

ヤマダさんの土の香りのする歌声、
今はライブ活動をあんまりしていないのが
もったいなくて、
無理やりお二人をひっぱりだしました。
最後まで曲の完成に協力いただき、
& いつも笑いのツボを押してくれて
ありがとう。

地を踏みしめ、目線は彼方に向けて打ち鳴らす、彼岸の音“カルカバ”—グナワ音楽とカルカバ（文・ヤマダカズヒロ）

グナワとは、音楽大国モロッコの誇る無形文化遺産で、儀式・音楽・踊り・物語・精霊／聖者信仰・先祖崇拝の文化の総称である。病を治療する秘儀として形骸化することなく現代に受け継がれ、また大衆芸能として市井の人々に愛さながら、近年は純粋な芸術としてジャズやロックミュージシャンはじめ世界の一流アーティストにも影響を与えてきた。
（写真右：ゲンブリを手に朝倉佳恵氏、写真左：カルカバを手にヤマダカズヒロ氏）
Everybody Sunshineで使用した鉄のカスタネット／カルカバは伝統的には複数人で演奏される。弦楽器ゲンブリはグループのリーダーが演奏し、その音やルックスから目が奪われがちだが、カルカバの働きとそれにまつわる話を知ると「カルカバこそグナワ」とも思えてくる。ゲンブリは紀元前の姿を残す一方、カルカバの起源は謎だ。確かなことはサハラを縦断した人々（※注）の手によって、モロッコ、アルジェリア、チュニジア、リビアなど北アフリカの地で作られたこと。

カルカバの形は「鎖で縛られた両腕を表す」
カルカバのリズムは「足につながれた鎖が歩行の際に刻む音」—グナワの言い伝え

人間は金属音を聞くと変性意識／トランス状態に入りやすいという。グナワのトランスパワーの源は、死と隣り合わせの、想像を絶する苦しみを伴うサハラ縦断を経験した人々が、精神の解放と救済を求める心にあると私は思う。

※注）16世紀の戦争による強制連行や奴隷貿易により、西アフリカや中央アフリカ地域から北アフリカへ連れてこられた人々が移住先で自助のコミュニティを形成し、グナワが誕生したと伝えられる。サハラ砂漠以南の多彩なアフリカ音楽や信仰の文化が出会い高度に再構築され、移住先に溶け込む為にアラビア語の歌詞やメロディ、イスラーム文化（神秘主義スーフィズムに内包する聖者信仰等）も取り入れ—それら文化的要素が「グナワ」として結集。奴隷となりながらもアフリカルーツのアイデンティティを守り、移住先イスラームの生きる知恵をも内包し、大切に伝えてきたのがグナワといえよう。

Gnawa Tokyo（ヤマダカズヒロ、朝倉佳恵）：心身に「聴いて効く音」を探求する音楽ラボを主宰。1998年よりインド音楽や日本の伝承音楽をモチーフに、創作曲の研究と演奏活動を経る。モロッコ伝統音楽グナワを熱愛して独学後、2015年弦楽器ゲンブリをSeddik Qanarochに師事、Gnawa Tokyoメンバーとして活動開始。グナワ界のスーパースターハッサン・ハクムーンと共演。フジテレビ／ヨルタモリ世界音楽紀行に出演。中東のニュースサイト『The new』でライブ動画が1カ月で170,000回再生され、「極東で愛されるグナワ！」と驚きをもってモロッコ、アルジェリア、チュニジアから反響を得る。2017年モロッコ初訪問後Huff Post紙にインタビューが記載される。モロッコ王国大使館主催ナショナルデイ他イベント、聴いて効く音レクチャーLive他。

「カルカバ簡単なんでしょ？——あるベリーダンサーの方に言われました。カスタネット系楽器は、楽器出来ない人向けと誤解されますが、グナワではあり得ません。この話はまたいずれ。ヤッチさんのやる気・元気・勝ち気が羨ましい。宗教や政治を語る時、目が鋭く光るヤッチ。笑いのツボが似ている仁子。紳士な船原さん。私のアイドル。」ヤマダ
「コロナ禍でのCD制作。録音をまたいでPCR検査を受け、次に身内が救急車で運ばれ、あわや搬送先がない恐怖を味わった。冬、深夜の待合室で独り。緊急手術で助かったと知らされた時、冷雨があがった病院の窓は薄青色の朝に。イラクで命の瀬戸際に立ち会ったヤッチさんが、全力で今を生きるのが、少しわかった気がする。」朝倉

佐藤真紀（Maki Sato）国際協力アドバイザー，デザイナー

　早稲田大学理工学部を卒業後、株）ブリヂストンで、タイヤ素材の研究開発を担当。湾岸戦争を機に、イエメン、シリアで活動後、日本国際ボランティアセンターでパレスチナに滞在。イラク戦争で緊急救援を指揮。イラク小児がん支援のためのネットワークJIM-NETを立ち上げた。子どもたちの絵をデザインして商品化。2019年からは、フリーランスで、「赤ベコで国際協力」を訴えシリア支援のTeam Bekoを主催。

ChalChalオフィシャルホームページを作ってくれた真紀さん、この度はクラファン立ち上げから、CDジャケット＆ライナーノーツまでお世話になりまくりでした。
ChalChal号の機関長。出港ご一緒できて感激です。いつもありがとうございます！！

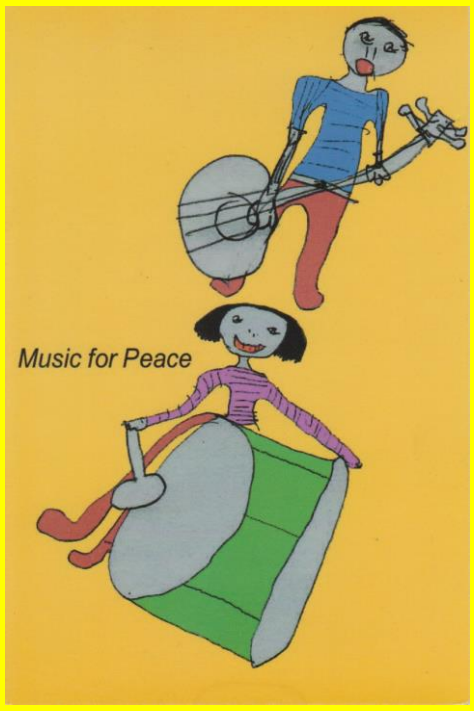
　今、僕はシリアの子どもたちにかかわっていて、2018年からシリアに通っています。ダマスカスのアートスクールに行ったら、内戦が続いているのに子どもたちの絵にそういう要素がなくて、一生懸命アートを楽しもうとしているのがいじらしくて、ChalChalのCDを飾るのにはもってこいだと思いました。HPを作るのにChalChalのイメージを聞いたときに「POPでサイケな国際派ユニット」といわれて、これしかないという感じがした。

　僕は、絵描きになりたいと思っていた時期もありましたが、1990年代の終わりにエルサレムの旧市街に子ども図書館を作る仕事をしていた時に、近所の子どもがよく遊びに来て、いたずらをする。僕のノートに何やら落書きがしてあってそれがとても素敵な絵で、捨てるのがもったいなくて、ちょうど、フォトショップが出始めたころで、色を付けたりして遊んでいるうちに、そういうのが楽しくなって、自分では絵を描かなくなった。911があって、子供たちの世界には、戦争が覆いかぶさってくる。
　イラク戦争では、子供たちの絵を紹介することで、戦争反対を訴えてきたのですが、出版社から、谷川俊太郎さんが詩集を出すので、イラクの子どもたちの絵を使いたいと相談され、僕もテンションが高ぶって、都合のいい絵を組み合わせるのは嫌だと、駄々をこねて、まだ戦争が落ち着かない時期に、子どもたちと一緒に絵を描いた。学校はやってなくて、用務員さんの子どもと毎日絵を描きました。その時できた絵本が「お兄ちゃん死んじゃった」（教育画劇）です。当時8歳だったムハンマッド君は、音楽の先生になっていて、自らも、アラブ音楽とジャズも演奏するバンドを結成してコンサートもやっています。
「コロナさんがやってきて」の歌に合う絵を探していた時に、姉さんのスハッドちゃんがかいてくれた絵を思い出しました。マイケル・ジャクソンのWe are the world をイメージして書いた絵です。早速ムハンマッドに連絡して「コロナの曲があるんだけど、マスクつけて使ってもいいか」ってお姉さんに聞いてもらった。すごく喜んでくれたらしい。他にも、曲に合う絵を探してみると、次から次に、私を使って！って主張する魚やら、鳥、ネコたちがでてきて、それらをちりばめてみました。絵に描かれた友情は、時間が経っても決して枯れることはないのです。

がんを患っていたシリア難民のタハニさんが描いた内戦
2015年ヤッチが慰問して「Everybody Sunshine」を一緒に歌った。

パレスチナの子どもが落書きした絵

写真：ムハンマッド君（2003年）



ムハンマッド君が描いた絵は、
「おにいちゃん、死んじゃった」に収録されている

هاني الدلة علي　Hani Dallah Ali/ハーニー・ダッラ・アリー

1969年　イラク・アンバール県ヒートに生まれる

1990年　バグダード造形芸術院卒業

2004年　ポーランド文化省の招待によりワルシャワで美術品修復技術を学ぶ

2005年　イラク情勢悪化しヨルダン・アンマンに一家で避難

　　初来日し東京と札幌で個展「混沌からの光」

2006年　2度目の来日。東京でイラク現代アート展、京都でイベント参加

2006年～2015年　ヨルダン、イラク、レバノンなどで個展多数

2016年　ナツメヤシの手すき紙を使用した新シリーズ「ナツメヤシと農婦」日本各地で展示

2017年　3度目の来日個展ツアー「ラヒール・ワタン～祖国・我を去りて～」

　　京都「堺町画廊」、仙台「TURNAROUND」、東京「ギャラリー古藤」

2018年　個展「Gray」Orfali Art Gallery アンマン・ヨルダン

2020年　個展「Shadow Rituals」Al Mashriq Gallery アンマン・ヨルダン

＊YATCHはハーニーさんと2004年バグダードで出会ったのをきっかけにしてイラクアートを日本に紹介するプロジェクトを始めました。

収録曲「ザクロの歌～チャルチャル」をテーマにした絵画作品（同曲ミュージックビデオに使用）

ヨルダン在住のイラク人画家ハーニーさんに描いてもらいました。

絵画と音楽、そして踊りとのコラボレーションをミュージックビデオでお楽しみください。

ChalChal☕座談会

ChalChalの世界観／聞き手：佐藤真紀

真紀
僕はNGOで働いてきて、イラク支援やっているYATCHと出会ったので、音楽をやるヤッチのイメージってなかったんですよ。で、何年か前に、音楽活動復帰するっていうミニコンサートを聞いて、いやらしさがなく、スーッと入ってきたんですよ。それが、ChalChalになってアラブや中東の音がついても、もっと自然にすーってくる。この世界観は皆さんのルーツからくるんでしょうか？

YATCH
いやあ、2015年に歌を再開してすぐ真紀さんに気に入ってもらえたのはめちゃめちゃ大きな励みになりましたよ。そうですよね、中東の音楽っていうと昔の印象はなんか怪しく謎めいていて、日本のアラブ音楽ミュージシャン界隈もなんだか独特の雰囲気で、特殊で専門的すぎてはじめは近寄りがたいなあってのはありましたね。でも実際に現地イラクで生の歌で「フォウゲンナハル（ナツメヤシの樹の上で）」聴いた時はまさに一目惚れ、もう一発で恋に落ちましたね。イラクの人々から感じてきた温かいおもてなしの心にあふれた人柄が歌にもにじみ出ていて、歌詞わかんなくても一緒に口ずさみたくなる、なんていい歌なんだろうって。今回の選曲もそうですが、ChalChalではそんな感じでなぜだかスーッと心に入ってきた「歌」を取り上げて、僕ら日本人の心にもさらにスーッと入っていけるように日本語で歌うようになったんですよ。

船原
僕は十代から旅をしていたので、中東に関わらず旅の中で出会ってきた世界観が自然と音楽や生活の一部になっていった、という感覚なんです。東京に定住して約１５年程になり、自分の中で「旅」という感覚が薄れてきていた頃、やっちさんと荻野さんが創ろうとする音楽に出会いました。国境や宗教的、人種などのボーダーに囚われすぎず、あくまで人、文化にリスペクトを持って表現しようとする姿に、一緒にやりたい！と。
たしかfacebookにも書いた覚えがありますが、初めてやっちさんに会った時、過去に旅の中で手を差し伸べてもらった、関わってきた人達の姿がぐるぐる巡ってきたんですよね。あれはとても不思議な感覚でした。ああ、自分にもそういう時が来たのか。って、よくわからない納得を得たこと、今でも覚えています。

さとこ
私はあのあたりだとエジプト、チュニジア、モロッコ、UAEに行っていて、あっちで聴く音楽って、もうただひたすらマクスーム（っていうリズム）の軽いものが多い感じがして、でも私はそういう音楽が大好きなんです。エジプト留学から帰ってきた時はベリーダンスも少し習い始めたりしてたので、自分としてはダンサーになるのかと思ったりした時もあります。でも、ジャンベとかピアニカとかやっているうちにウードに出会って。ウード弾きながら歌ったらどうかなと思って、オリジナル曲を作ったりして遊んでいた時代もあって。古典音楽もいいんですが、もっと歌えてなじめるような音楽ってないのかっていうのを少しずつ見つけていっての今が、チャルチャルだと思います。

真紀
昨年からのコロナ禍で足元が揺らいでますよね。今回「コロナさんがやってきて」っていう曲も入っていますが、皆さんは、コロナ禍をどうとらえていますか？身の回りの変化を教えてください。

YATCH
僕の場合それをまさに「コロナさんがやってきて」の歌で表しちゃったんで、曲解説も合わせて読んでいただければさらに詳しくわかりますが、このCDができてこうして座談会というか真紀さんのインタビュー受けてること自体がまさにコロナ禍によって生まれた大きな変化ですよね。

船原
人前で演奏する機会が減ったことは確かでした。今でもそうですがライヴだけではなくて「多人数同時に会う」ということを避けていますので、生徒さん方には大変申し訳ないのですが、レッスンも個人レッスンのみにさせてもらっています。というのも僕は音楽活動以外に医療機関で仕事をしています。重い疾患を抱えている方との関わりなので、緊張感のある一年でしたし、自分の行動をかなり制限せざるをえませんでした…
世界中の方々がそうだと思いますが、人と触れ合うことの大切さを実感した時間でしたよね。それと、より身体や心のことを気遣うようになった人が増えたと感じています。自分自身や周りの環境、仕事に対しての向きあい方を「整えよう」という意識を持った方が増えたことで、僕の身体に関わる知識や経験を活用した仕事の提案を頂いたことは非常にありがたかったですし、コロナ禍においても前向きな想いで人と関わろうとする方々との話の中では、本当に多くのインスピレーションを頂けました。
長く続けているミュージシャンは大抵どこか身体に不調を抱えています（苦笑）。今までは生徒さんに身体の構造や使い方を解説する程度でしたが、今後はもう少し音楽と身体操作をリンクさせた活動もしていきたいと考えています。

さとこ
私は数年前に18年近く勤めていたところをやめて上京(笑)して、生活スタイルを変えてウードを中心に動くようになって、コロナで変わったことといったら、実家に帰りづらくなったりとか、親族と会えなくなったりとか。ちょうど2019年冬に初めてカイロでのウードツアーを始めたところだったので、向こうに行けなくなって残念ですね。あとは、世界中が同じ状況で逃げ場がない、みたいなとこで、逃げられない平等みたいな感覚が有難かったり、これからに向けて準備する時間でもあるし、失業が当たり前になってくると逆に仕事がなくても堂々と生きていける、とか、私は少し楽観的に考えています。お金は必要ですが(笑)。

真紀
現地に行けなくなってきて、日本は閉鎖的になってきています。ChalChalは、国際ユニットとうたってますが、どういう風に、世界とつながっていけるだろう。

YATCH
コロナは世界中を閉鎖的にしてしまってるけど、この辛さは自分たちだけではなくて、世界中でみんな同じ辛さを乗りこえようとしているんだという風に考えることができれば、逆にかつてない連帯感を生み出すこともできると思うんですよ。現地に行けなくても気持ちをつなげられるネットをうまく使っていければ、逆にこれまでにない面白いことを一緒に作っていけるじゃないかって。ただネットはあくまでつなげるためのツールだから、一体何をこっちから差し出すことができるのかってことが問われてくる。そのための準備として、これまでChalChalでやってきた歌をより楽しめるよう面白く工夫していい音でレコーディングして、さらにはアートともコラボしながらそれをミュージックビデオ（MV)にしようとやっているわけなんですよね。数年前に僕がイラクの歌日本語で歌ってる友人宅パーティーでの動画がたまたまアラブのSNSで取り上げられバズった時も、なんだこの日本人？イラクの歌やってんじゃん！って面白がってくれてました。今やってるMVもきっと楽しんでもらえると思うし、それがきっかけとなって日本に興味持ったり日本人とつながりたいって思う人が中東はもちろん世界中で増えてくれると嬉しいですよね。

船原
やっちさんのバズった話がまさに、ですよね。世界中どこからでも繋がれるってことは今までも分かってはいたけれど、もっと現実的に、そしてそれを活用していくことを学ばないとな、と。発信することに関しても、もっとボーダーレスに展開してゆくための準備も想定していますし、何より堂々と現地に向かえる日まで体調も整えないと！

さとこ
いつのころから国際派ユニットというタイトルがついていて、そのままになってますね(笑)。
たまに世界文化史年表っていう巻物をみるんですが、いまの世界は数百年しかない歴史の国に牛耳られているような構図になっていて、古くからの美しい文化を継承しているはずの国々のことがあまり伝わってこない。そういった意味で私たちの気持ちって国内ではなくて国外に向っていることは確かだと思います。コロナが去ってもネットはどんどん発達することを考えると、まずはいいモノを作っておこうと。

真紀
コロナ後は、もっとデジタル化進んでCDなんてなくなる方向かと思ったけど、「ふるさと」をCDでね、ジャケット楽しみながら聞くなんて最高の贅沢ですよね。コロナで、孤独に病院で死んでいく高齢者のニュース聞くと届けたいですよね。チャルチャル商会として終活が楽しくなるような商品作ってくださいよ。

YATCH
そうなんですよね、コロナ禍でこれまで当たり前だったことができなくなって辛くなることはたくさんありますが、同時に当たり前であることの有難さや、もう時代遅れになっていたものの魅力にも気づける機会でもあるんですよね。ChalChalでやってる歌も古い曲ばかりだし、楽器も全部アンプラグドの生楽器の生演奏ですが、歌や楽器の音の元々の素晴らしさと組み合わせの工夫次第でこんなに面白く新しいものができるんだって伝えていきたいです。
そして今回のクラファンではリターンのひとつ「あなたの歌つくります」コースが高額なのにすぐ完売し追加となり大好評だったんですけど、こうしたオーダーメイドの楽曲制作というのはこれからもっと需要増えてくると思いました。家や車などモノへの消費よりも、旅や特別な体験などにお金を使いたい人が増えていく時代の流れの中で、真紀さんも提案してくれたように、終活のひとつとして自分史を書いたりする他に自分の人生のテーマソングをつくってほしいという人もきっと増えるんじゃないかと思います。今回クラファンはそうした未来に向けての気づきがたくさんありましたね。
ChalChalは今後音楽を中心にではありますが、様々な可能性を生かしてチャレンジを重ね新しいビジネスにも発展させていきますので、真紀さん今後ともどうかよろしくお願いしますね！「チャルチャル商会」って名前にするかはわかりませんけど(笑)、さらに愉快な仲間と一緒に宝船チャルチャル号で新しい冒険の海に出ていきましょう。ヤッラ！（アラビア語でLet’s Go!)

パンフレットデザイン：荻野仁子

ChalChalの最新情報は、↓オフィシャルホームページをチェック！
http://chalchal.html.xdomain.jp/Chalchal/　　QRコード→
各曲ミュージックビデオも出来上がり次第おしらせします！

この度のChalChalの1stアルバムCDは、
クラウドファンディングCAMPFIREの新型コロナウイルス（COVID-19）サポートプログラムの
プロジェクトにより、92名様からご支援いただき目標金額の120%を達成し完成することができました。
ご支援いただいた皆様に心より感謝申し上げます。